

NJ 素流協 News

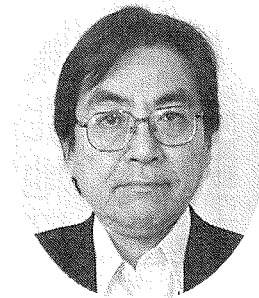
平成31年1月10日
第168号

平成31年1月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

年頭所感

ノースジャパン素材流通協同組合

理事長 鈴木信哉



明けましておめでとうございます。謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。旧年中は、組合員及び関係機関の皆様には、ノースジャパン素材流通協同組合の事業運営に対し格別のご理解とご協力を頂きまして、厚く御礼を申し上げます。

平成30年を振り返ると、まずもって災害の多い年であり、地球温暖化の影響を感じる一年でありました。西日本豪雨、台風21号・24号、さらに北海道胆振東部地震等、各地の被害に遭われた皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。

林業・木材業界については、次の

ような年であったと考えます。

1. 合板業界のフル生産が続いています。かつては、製品価格の乱高下が激しく、合板は「相場商品」とも言われていましたが、最近の価格は安定しており、工場はフル稼働の状況となっております。これは、構造用合板3×6板の単一商品生産から、複合床板基材や内装用合板等へと生産品目が多様化してきたことが功を奏していると考えます。合板用材の自給率の上昇を考えれば、今後この状況は続くことが期待されます。

2. 集成材業界もフル生産が続いています。生産性が高いラミナ工場はコストを吸収できることから、輸入製品と十分に対抗できる状況が続いています。輸入製品との競合の際にカギとなる為替レートについては、円・ドル為替相場が1ドル当たり110円台、円・ユーロ相場が1ユー

ロ当たり130円台と安定しています。一方、残念なことは、未だに梁・桁用はレッドウッド(欧州産針葉樹)、集成材、米マツの独壇場で勝てないことです。これを克服することが、今年のチャレンジテーマです。

3. 針葉樹製材業界も安定していましたが。かつて言われたような「秋需、冬枯れ」ではなく、一年を通じて生産・加工が行われている状況です。これは、建築技能者の質・量の能力低下や非住宅木造物件の拡大が影響しています。現在、機械プレカット工場の製品における非住宅物件の割合は、多いところで30%に近づいています。従来主流を占めていた米ヒバ・米ツガの防汚土台や、ロシアエゾマツ・アカマツの小角類等は、今後国産材への転換が加速すると考えられます。

4. 広葉樹業界は、海外情勢、すなわち為替変動や現地価格の上昇等による輸入丸太の高騰、ロシア材の輸出関税引き上げ、またクリーンウッド法施行等の影響から、国産材への期待が引き続き強くなっています。

原木市場（共販所）の広葉樹シフトが進んで、広葉樹の価格帯が素材生産業者の間に広く周知されたことにより、広葉樹生産への関心が高まっております。さらなる出荷増加が見込まれます。

5. バイオマス等原材料は、新規稼働工場が増加して、活況を呈しました。とりわけ、32円材の需要は旺盛で、価格が上がっています。これには、A材・B材の活況も影響しています。しかしながら、本来A材であるべき小径木丸太がC材・D材に流れてしまっている現状については、

改善が必要と考えます。

このような状況を踏まえて、昨年と同様に、今年の課題を考えてみます。

- ① 意欲と能力のある林業事業体の位置付けの確立を踏まえ、組合員の登録はもちろんのこと、分かり易い解説に努める（通達等は正確を期すあまり、必ずしも分かり易い表現となっておりません）。また、新規就業者の増加、設備投資の充実を図る取組みを推進する。
- ② 供給先の情報をスピーディーかつ正確に伝える体制を充実させる

とともに、組合員の困りごとの解決や、樹種別・用途別の伐採順序等伐採計画の作成等に役立てるよう、中立的な立場で情報のネットワーク化を推進する。

- ③ 原木輸送トラック業界について、林野行政施策の対象としての確立を図るとともに、組合員のニーズに応じた専用トラックの要望を発信する。あわせて、納入先工場の受入日時の設定や休憩所の整備等に関し働きかけを行う。
- ④ 再造林の充実に対応して、カラマツ種子の確保に引き続き努める

ほか、短コロ等林地残材の販売を促進するために、需給双方に働きかけを行う。

- ⑤ 組合員の立地や伐採地の条件に応じて、A～D材工場の選択的マッチングに努め、山元への利益還元の徹底を図る。
 - ⑥ 新たな大型工場、バイオマス工場の新設・拡充を踏まえて、組合員としての体力増強に努める。
- 組合員ファーストのノースジャパン素材流通協同組合の目的の達成に向けて、皆様方のご指導ご協力をお願いして、年頭所感といたします。

平成30年度「第2回東北地区需給情報連絡協議会」

去る平成30年11月29日、盛岡市内において、東北地区広域原木流通協議会（会長・N J素流協鈴木信哉理事長）の、「第2回国産材の安定供給体制の構築に向けた東北地区需給情報連絡協議会」が開催され、川上・川中・川下の関係者約70名が出席した。

田県立大学の飯島泰男名誉教授が座長となり、東北地区の課題である「原木供給の季節間変動の平準化」を主なテーマとして議事が進められた。

▽需給情報の主な報告

林野庁、中央団体、東北地区委員（10名）から、全国と各地域の需給の状況、丸太と製品の市況、素材生産の状況等の報告があった。

豪雨等災害の影響で一部地域からの出材が滞ったこと、またそれ以外の地域でも、合板・製材工場の旺盛な需要、新規大型工場やバイオマス発電所の稼働等から原木不足の状況が続く、原木価格が上昇したとの報告があった。

▽地区課題「原木供給の季節間変動の平準化」についての討議

東北地域では、多くの素材生産事業体が国有林請負生産に従事する5月頃から11月頃にかけて原木供給量が減り、加工工場の集材に影響が出ている。こういった原木供給の季節間変動への対策を論点に討議が行われた。

飯島座長は、「前半の需給情報報告の中で、複数の加工工場から、『出材が減る時期はそれを見越して在庫を確保している』というコメントがあっ

た。川下で在庫を増やしておけば対応できるということか」と議論の口火を切った。

また、鈴木会長は、「国有林の間伐は皆伐と比べて生産性に差があり、労働力配分が大きく変わることによる、全体として平準化されなくなる」と考えている。供給量が夏冬一定しているのか、いないのか、川上側と川下側それぞれの認識はどうか。」と議論の展開を求めた。

協議会委員から出た主要な意見は次のとおり。※発言者は委員区分で表示

・(加工工場)遠方へ行くほど物流コストがかかる。原木在庫は2〜3ヶ月分ないと高い原木を買わざるを得なくなる。

・(素材生産)工場側は、夏場は原木が劣化しやすいため受入れを絞らざるを得ないというのが共通認識ではないか。小規模の素材生産業者は伐つたものがすぐにはけないと、生産の継続の根本にもかかわる。

・(素材生産)国有林主体の生産をしているが、5年、10年といった長期

の事業になれば、現場人員のセット構成の改良が可能となり、高性能林業機械の稼働率が高まり、生産量の増加とともに供給の平準化につながるのではないかと考えている。

・(森林管理局)長期大ロットでの契約については提案があり、実際に検討中である。

・(県森連)出荷窓口を単純化することで、工場へ向ける材の状況を把握し、出荷者間の過不足を調整している。材が出ないというのは、国有林請負事業に入る生産者が増え、生産量は落ちていないが自由に動かせる木がないという問題だと思ふ。システム販売を受けた工場には夏場もある程度丸太が入るが、そうでないと集材に非常に苦勞する。

・(県森連)複数の工場と素材生産業者グループ・森組グループとで、年数回需給調整会議を行い、出荷数量を現場で調整しながら納めている。

・(木産協)国・県道沿いにサテライト的な中間工場を作り、素材生産が旺盛な時期に材を集めて対処する必要があると考えている。ただ、二

度手間はコストアップになるというのが大方の意見である。合板工場は土場の広さを生かし、原木を大量に在庫してほしいと思う。

・(チップ工場団体)製紙会社の国産チップ需要は針・広葉樹ともに堅調で、受入制限なく出荷している。ただしバイオマス向け需要の拡大等で原木獲得競争が激化し、集荷と価格に影響が出ている。素材の生産性向上のため、機械設備導入の補助事業等施策をお願いしたい。また低質材システム販売の方法の見直しとして、ロットの小口化、地域限定、製紙向け・燃料向けを区分した販売を検討して欲しい。

・(森林管理局)現在、最小の販売ロットは千m³に対し、低質材は3千〜5千m³と比較的大きくなっている。地域的なところを含め検討したい。また、生産請負の作業着手までの期間短縮に関しては、許認可等の部分で早期に作業に入れるよう各森林管理署を指導強化したい。

・(素材生産)原木不足に対して、主伐で対処したいが、主伐は再造林が

必要である。補助金等手当があれば協力したい。

・(加工工場)材が出ない時期に足りなくならないように原木を購入したいが、必要な樹種の時期と比率があるので、在庫の樹種ごとのバランスを崩さないようにやっていきたい。

▽まとめ

【岩手大学農学部 伊藤幸男准教授】

東北地域の特徴として、山から工場への原木直送化と系統化が進んでいることがあるが、それが今供給の弾力性を縛っているのではないか。流通の仕方を再考する時期なのかも知れない。また直送化が進むことで地元地域との関係が薄まり、問題解決の軸足の置き所が見つけられない状況になっているのではないか。一方、労働力確保の問題が新たな段階に入っている。時間をかけて業者を育て、雇用条件も他産業に見合うものを山側で作っていかなければならない。もうちよつと山林所有者のところを整理できたらよかった。皆さんで中長期の課題を共有し、問題解決に協力していけたらと思つてい

る。

【森林総合研究所東北支所 天野智将
森林資源管理研究グループ長】

再造林に関して森林総研もここ10年くらい対応を研究している。本年は大きなプロジェクトである苗木生産から再造林全体の低コスト化の終了年である。その中に、苗木の効率的生産のための種子選別機の開発がある。研究成果については今後公表していくので、好感触を持っていただければと考えている。

【木材産業課 牛尾課長補佐】

この会議は、6年前の広域原木流通協議会の立ち上げに始まり、広域化する流通にどう対応していくかという構想が作られ、それらを引き継ぐ形で需給に関する情報共有、意見交換を進めてきた。原木供給の平準化に関しては、国有林面積が大きく占める東北地域特有のもので、民有林と国有林がうまくやっついでいこうとするとき、行き着くところは労働力・人であると思う。林野庁としても何らかの形で支援を考えていくので、是非とも議論を継続していただきたい。

トピックス

(秋田県)大館北秋田地域の 林業関係者が視察で来訪

秋田県の大館北秋田地域林業成長産業化協議会(会長・福原淳嗣大館市長)の一行14名が、11月27日、視察で当組合に来訪された。協議会は、

地域の林業成長産業化の実現を目的に、大館北秋田地域の林業関係者により平成29年10月に発足した。鈴木理事長が組合の概要・取り組みを説明し、質疑応答となったが、共同販売事業、岩手県森林再生基金事業などについて熱心な質問があった。

長野県佐久市協和財産 区議会がカラマツ流通 視察で来県

長野県佐久市の協和財産区の依田永一議長ほか一行8名が、11月27日当組合を訪れた。協和財産区では、カラマツ林を多く所有しており、当組合の取り組みや東北のカラマツ流通の近況を研修するために来県され

たもの。鈴木理事長は、こちらの説明にとどまらず、中部森林管理局長を務めていたことから長野県のカラマツ産業の課題解決などについてもアドバイスをした。

翌28日は、組合員の(有)二和木材(滝沢市、小笠原清貴代表取締役)のカラマツ製材工場を視察して帰県された。

平成31年度岩手県林業関係 施策の要望活動を実施

11月28日、岩手県森林・林業会議が岩手県議会、岩手県農林水産部に對し、平成31年度林業関係施策要望を実施した。当組合から、鈴木理事長、高橋常務理事が出席した。

【要望事項】

1. 再造林促進対策の推進
・「いわての森林づくり県民税」の再造林事業への活用ほか
2. 県産木材の利用促進と原木の安定的供給等
・(仮称)県産木材利用促進条例の早期制定と民間事業者の木材利用促進ほか

3. 治山・林道事業の推進

・平成28年の台風10号による林道施設災害の早期復旧に向けた支援ほか

4. 担い手対策

・森林施業・担い手対策の具体的な計画策定ほか

第3回東北森林管理局 国有林材供給調整検討 委員会の開催

東北森林管理局の国有林材供給調整検討委員会が12月6日に開催され、高橋常務理事が出席した。

検討の結果は次のとおり。

- ・製材、合板工場ともに原木の引き合いが強く、特に良材を取り扱う製材工場に不足感が見られる。
- ・原材料については、製紙、バイオマス用ともに引き合いが強く、今後高値横ばい状態が続く見通し。
- ・全体的に原木の不足感があるが、12月以降は良材を含めて原木の流通量が増加していく見通しであることから、現時点で供給調整の必要はななく、国有林には、引き続き価格及び需給動向の注視をお願いする。

取扱最大径	40cm以下 (7%)	40~50cm (36%)	50cm以上 (57%)	
大径材割合	1割以下 (43%)	1~2割 (21%)	3割以上 (29%)	未回答 (7%)
対策(意見)	<ul style="list-style-type: none"> 補助活用による施設整備の増設等 2×4~2×12の製造 構造材、特に梁桁の需要創出 合板、CLTによる利用、大径材専門工場での利用 			

〔製材所のアンケート結果(抜粋)〕
 り、その後、意見交換が行われた。
 題解決に向けた取組事例の報告があり、その後、意見交換が行われた。
 製材所を対象とした現状把握のためのアンケート調査結果、国内での問題解決に向けた取組事例の報告があり、その後、意見交換が行われた。
 営業企画部長が出席した。
 会議では、県内の団体、大型工場、製材所を対象とした現状把握のためのアンケート調査結果、国内での問題解決に向けた取組事例の報告があり、その後、意見交換が行われた。

スギ大径材の利用促進を協議
 岩手県林業振興課主催の第2回スギ大径材利用促進研究会が12月10日に開催され、高橋常務理事、小野寺営業企画部長が出席した。

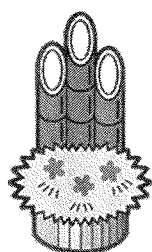
国有林素材山元委託販売 入札結果

市日: 平成30年12月7日(金)
 市場: 岩手南部森林管理署 (参加人数10名)

市日: 平成30年12月10日(月)
 市場: 岩手北部森林管理署 (参加人数4名)

売払番号	樹種	長級(m)	径級(cm)	等級	本数	材積(m ³)	応札枚数	土場
605-1	スギ	4.00	18-32	込	54	12.652	1	中ノ林
605-2	スギ	3.00	18-26	中玉	108	14.671	2	中ノ林
605-3	スギ	2.00	18-40	込	603	59.116	2	中ノ林
605-4	スギ	2.00	18-32	込	479	40.440	2	中ノ林
605-5	スギ	2.00	18-34	込	602	53.025	2	中ノ林
605-6	スギ	2.00	18-38	込	395	36.467	2	中ノ林
605-7~11	スギNA	2.00		原料材		165.160	5	中ノ林
605-12	アカマツNA	2.00		原料材		19.152	5	中ノ林
605-13~15	ヒノキNA	2.00		原料材		194.242	4	中ノ林
605-16	スギ	4.00	18-44	込	138	34.760	4	長橋
605-17	スギ	4.00	18-44	込	29	9.016	2	長橋
605-18	スギ	2.00	18-42	込	33	5.181	1	長橋
605-19	カラマツ	4.00	18-38	込	99	26.934	3	長橋
605-20	スギNA	2.00		原料材		12.285	4	長橋
605-21	カラマツNA	2.00		原料材		7.106	3	長橋
605-22	LA	2.20		原料材		22.364	3	長橋
605-23	カラマツ	2.00	18-42	込	809	112.027	4	横岳前山
605-24	カラマツ	2.00	18-44	込	652	95.283	4	横岳前山
605-25	カラマツ	2.00	18-40	込	545	71.175	4	横岳前山
605-26	カラマツ	2.00	18-42	込	747	84.033	4	横岳前山
605-27	カラマツNA	2.00		原料材		122.661	5	横岳前山
605-28	LA	2.20		原料材		60.245	4	横岳前山
合計						1,257.995		

売払番号	樹種	長級(m)	径級(cm)	等級	本数	材積(m ³)	応札枚数	土場
104-1	スギ	2.00	18-72	込	91	13.358	2	青松沢
104-2	スギ	2.00	18-52	込	342	55.526	2	青松沢
104-3	スギ	2.00	16-58	込	551	77.314	2	青松沢
104-4	スギ	4.00	20-60	込	78	42.172	3	青松沢
104-5	スギ	4.00	26-50	込	64	37.018	3	青松沢
104-6	スギ	4.00	18-58	込	197	79.526	3	青松沢
104-7	カラマツ	2.00	18-46	込	487	58.072	4	青松沢
104-8	カラマツ	2.00	18-38	込	375	43.711	4	青松沢
104-9	カラマツ	2.00	18-42	込	383	53.002	4	青松沢
104-10	カラマツ	2.00	18-40	込	308	46.710	4	青松沢
104-11	カラマツ	2.00	16-46	込	349	39.643	4	青松沢
104-12	カラマツ	2.00	16-34	込	257	26.934	4	青松沢
104-13	カラマツ	2.00	16-48	込	383	47.716	4	青松沢
104-14	カラマツ	2.00	16-44	込	1063	113.463	4	青松沢
104-15	カラマツ	4.00	20-40	込	89	33.446	4	青松沢
104-16	カラマツ	4.00	18-40	込	591	146.594	4	青松沢
104-17	カラマツ	4.00	18-38	込	152	44.498	4	青松沢
104-18	アカマツ	2.00	18-42	込	203	34.648	4	青松沢
104-19	アカマツ	2.00	18-52	込	187	28.533	4	青松沢
104-20	アカマツ	2.00	18-42	込	375	51.790	4	青松沢
104-21	アカマツ	2.00	18-40	込	585	67.703	4	青松沢
104-22	アカマツ	2.00	18-32	込	467	50.770	4	青松沢
104-23	アカマツ	2.00	18-44	込	354	53.677	4	青松沢
104-24	アカマツ	2.00	18-42	込	196	28.760	4	青松沢
合計						1,274.584		



おすすめカレンダー 森と人カレンダー2019 『林業の仕事 技と心』

制作: 全国林業改良普及協会(全林協)
 価格: 1000円+税 各月1見開き(A4×2頁)

林業関係者に好評の全林協のカレンダーです。
 5月には組合員の(株)松田林業(岩手県住田町)が登場します。
 懐かしくて、頼もしい 幻の6輪駆動車「てーだぶ」トラック

お申し込みは全林協、各県の林業改良普及協会へ
 ※アマゾンからも購入可能

視察報告

スイスの林業生産現場と

林業機械会社視察

(その2)

ノースジャパン素材流通協同組合 営業企画部主任 佐々木 絵 理

(第166号より続く)

◆ウィッセン社機材による架線集材視察

ブナ林を見ながら標高1500m、ハイキングコースが多くある保護森林の有料道路に入り、雪崩保護柵が設置されている場所の森林整備を行う現場を視察しました。

この現場はウインチの上方設置が不可能なために、架線は400mしか張ることができません。400mの架線に対し中間支柱は3本、架線架設には3〜4人で1〜1.5日必要で、生産量は架線長400mに対して400m²。1日60〜70m²生産されるそうです。(施工方法は択伐) 伐採した原木は、伐採を請負った業者が販売しています。木の種類と利用方法は様々で、下りてきた原木は、Wood

y(Konrad社のプロセッサ)で造材されていきました。



架線集材現場Woody ヨーロッパシエア50%

このように、経済効率が悪い事業にはスイス連邦政府とベルン州から補助金が支給されるため問題ないとの説明でした。

通常の現場では、平均1〜1.3kmの架線を3日間で張り、伐採量は1ヶ月1600〜1800m²

になるそうです。(架線設置の必要最小傾斜は30度)

視察後の夕食会では、日本で架線を張る場合の方法や、考えなどを教えていただきました。

作業道を作らなくて済むので、森を荒らさないことや、現在、架線集材をしていない地域でも、伐採現場が奥地化していくと、架線との組み合わせも検討する必要が出てくること。便利である反面、

とても危険で、ワイヤーが切れて飛んできた場合は重大な事故につながる。危険なのはわかって

いるが、現場では切れるまで使っているのが現状であることなど、現在頻繁に使用している地域、使用していない地域で様々な意見を聞くことができました。

◆スイス木質エネルギー事情
20年前からペレットが作られています。スイスの規定で素材は製材所から出るおが粉のみ使用可能です。森林は常に10年計画が必要で最高50%までの択伐のみで皆伐は基本的に許可されていません。

択伐の際にチップ材が出ますが、

1m²の原木から2・8m²のチップが生産されることでした。天災で原材料が足りない時などはプラントに補助金も出るそうです。

また、日本で使われるパーム椰子殻(PKS)はスイスでは使われません。

◆シユミット株式会社・地域熱供給システム視察

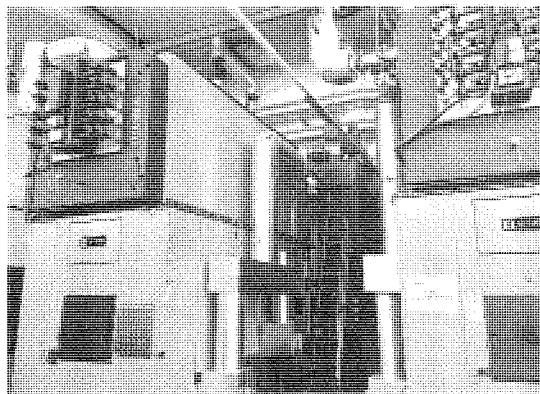
シユミット社は、1936年創業の木質ボイラーの製造を行う会社です。

スイスの国内支社の他、ドイツ、オーストリア、フランス、イタリア、ポーランドに子会社を持ち、エネルギーの完全利用を目指しています。岩手県林業技術センターにもシユミット社のチップボイラーが導入されています。

こちらでは、ミュンシュヴィレン地域の熱供給システムを見学しました。新型の大型ボイラーは、灰を地下に落とすシステムで、チップサイロがありエレベーターで上げてサイロに入れます。チップの

年間使用量は、6千〜7千³m³、毎時160³m³運ぶことが可能です。冬は360kWh、夏は50〜120kWhと需要に大きな差があるとのことでした。

また、家庭での設備投資額は、1万3千スイスフラン（約150万円）ですが、補助金が2割出るそうです。



チップボイラー UTSR-1200

◆バウムガートナー&ゾーン株式会社 チップ工場視察

バウムガートナー&ゾーン社は、50年以上の歴史を持ち、伐採、チップ製造、配給などチップに関わる様々な仕事を行う会社です。

こちらでは、移動式チップパー機によるチップ製造を見学しました。クレーンの先についた大きなハサミが材を掴み取り、尖った突起がいくつもついた歯車の回転するチップ製造機に投入されます。ものすごいスピードでチップとなり、トラックの後ろについたコンテナに噴出されていきました。径級50cm程度の原木をまるごと1本ずつ、細めの原木は数本まとめて投入され、原木で毎時250³m³、枝で毎時200³m³のチップが出来上がります。粉碎能力の高さに「日本とは桁違い！」と驚きの声が上がっていました。



チップ製造を見学・桁違いの粉碎能力

上乗せ部のチップパー機の価格は70万ユーロ（日本円約9030万円）、トラックが30万ユーロ（約3870万円）合わせて、1億2900万円程。

チップの販売価格は、広葉樹80%針葉樹20%混ぜたもので40スイスフラン/m³（約4600円）、100%広葉樹は48スイスフラン/m³（約5520円）、100%広葉樹で湿度10%まで乾燥させたチップは60スイスフラン/m³（6900円）。

10%まで乾燥させたチップは、オーガニックのバイオガスを使う会社と契約していて、コンテナにウエストヒートを入れることによって乾燥させているそうです。

この他、庭や公園などの不要木の伐採回収も行っており、料金は1本1800ユーロ（約232200円）程。

吊るし切りに特化した高所作業車は24mのクレーンを付属し、3tまで掴むことが可能。（真横で800kgまで掴む）1本の木は約1時

間で伐採するそうです。高所作業車の価格は110万ユーロ（1億4190万円）程。こちらの実演は見ることができませんでしたが、この作業車はとにかく凄いです！と社長が熱く説明して下さいました。

◆終わりに

普段、営業事務として仕事をしているため、現場の知識もない私が参加することに不安がありましたが、見るもの全てが新鮮で、さらに林業について知識を深めたいと感じました。事務の仕事だけでなく、今後はもっと現場に足を運ぶ仕事もできたらと思っています。また、一緒に参加された方々の話も大変興味深く、日本国内でも地域によって様々な意見を聞いたことも大変勉強になりました。

最後に、今回の視察でお世話になった鹿児島県素材生産業協同組合連合会並びに酒井秀夫先生ほか参加者の皆様、また、当組合の関係者や職場の皆様にはご理解とご協力いただき心より感謝申し上げます。

ちよつと気になる木の話

30

丸太の季節感

変動の平準化

東北が抱える、特徴を踏まえた課題とは？

国産材使用の大型製材・集成材・合板工場の立地が進む中、丸太の需要量は、年間を通して毎月ほぼ一定量が必要となる。製材は、冬期間は切削スピードが若干落ちるので、需要量は多少は少なくなるが、ところが東北では、毎年秋から冬の入り口にかけて丸太の供給量が減少し、需給ギャップが生じる。何故だろうか？

業界紙の一般的解説では、国有林が多く、素材生産者が請負生産に回るためとされている。伐る場所が国有林であれ民有林であれ、同じ労働力が投入されるのであれば、同じ量の丸太が供給されるのではと疑問を持つ人もいる。しかし、一般的に国有林は列状間伐、民有林では皆伐が多い。そのため、生産量の違いは明らかで、列状間伐は皆伐となるため、国有林の請負期

間の市場の供給量は落ちることとなる。それなら、秋口から冬の入り口の期間ではなく、もっと需給ギャップ期間が長いのではとの疑問がわく。春からしばらくの間は、冬伐り材のストックが土場側だけでなく山元側にもあり、供給が上回るために、需給ギャップが生じないのである。このストックが底を尽き、次の生産性の高い皆伐からの供給が出るまでの間が、秋から冬の入り口の期間となるのである。次に造林問題である。コンテナ苗の増加は、植栽の季節を選ばなくなると言われるが、雪国である東北では限定されることは明らかである（九州では、古くから春植えと言われ、1く3月に植林されてきた）。雪の中で植えられる訳はなく、植栽は雪のない季節となり、下刈は、もちろん下草が伸びる時期となる。とすれば、国有林の請負生産だけでなく、国有林・民有林ともに夏場の造林作業に林業労働力は引つ張られることとなり、更に生産力が落ちるのである。うーん、でも造

林専門の業者がいるのでは？かつてはそれもあつたが、造林の労働力の高齢化、不足は深刻となり、素材生産業者、森林組合の伐採班も動員されなければ無理な状況にある。ましてや、これからは再造林時代である。今後、更にトレンドは続くかと推測される。

あわせて、森林組合を中心とした間伐補助金の実施期間の問題もある。当然年度会計なので、年度末までに確実に実施されなければならず、結果として年度末に集中的に実施されることとなる。結果、冬場の生産量が増加することとなる（夏場造林に従事することももちろんある）。

その他にも、アカマツ、広葉樹は、樹木が水を上げなくなるのは秋以降となるため、これらの伐採に入る秋口は、スギ・カラマツの一般材の生産量が落ちるといふ副次的問題もある。

余談だが、山村の労働力不足で、機械化された稲作の田植え・稲刈りにも、山村にいる林業の若手労働力が引つ張られる傾向があり、林業的に言えば「田植え・稲刈り休暇」となる。

それでは、解決策はないかである。

まずもって、林業従事者を増やして、素材生産業者が国有林請負班と別に、民有林伐採班をつくることである。3班（セット）あれば、1班（セット）は民有林伐採班とすることが重要である。このことにより、間伐と皆伐の生産性の差を緩和することができる。

また、大型工場側も素材生産側も、冬伐りのストックを確保するストックヤードの整備を進めることも重要である。これらの課題には、更に造林作業の生産性向上が欠かせない。皆伐時に、機械地拵え・植栽までしてしまふことが必要である。それには、立木を買った際に、地拵え・植栽の計画をセットとして、年度またぎの予算を計上していく仕組みが必要となる。あわせて、短コロや不良木を林道・作業道脇に集積しておく。これはバイオマスD材利用にもつながる。この分野なら、若手林業従事者も苦になることはないのである。いずれにしても、東北の課題に真剣に向き合うことが必要である。国有林が皆伐になれば……。でも……。造林量も増えるか……。

平成 30 年 12 月 分 の 販 売 実 績

樹種	合板・LVL用			製材・集成材・その他用			計		
	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	9,083	80.2	101.3	11,264	80.6	131.3	20,347	80.4	116.0
カラマツ	4,348	102.3	216.8	240	103.4	57.0	4,588	102.4	189.1
アカマツ	2,313	96.8	110.9	1,250	451.6	396.1	3,563	133.6	148.4
その他	0	*	0.0	235	32.3	570.7	235	32.3	163.5
合計	15,744	87.7	119.6	12,989	85.4	138.8	28,733	86.6	127.6

樹種	燃料用		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	4,414	63.3	91.1
カラマツ	1,780	101.4	157.4
アカマツ	1,164	98.2	38.6
その他	0	*	0.0
合計	7,358	74.2	81.3

樹種	今年度累計			
	合板・LVL用 (m ³)	製材・集成材・その他用 (m ³)	計 (m ³)	燃料用 (t)
スギ	97,032	109,887	206,919	67,439
カラマツ	34,410	1,969	36,379	16,256
アカマツ	24,527	1,527	26,054	11,961
その他	111	2,983	3,094	117
合計	156,080	116,366	272,446	95,773
目標達成率 (%)	74.3	80.3	76.7	76.6
計画量	210,000	145,000	355,000	125,000

注) *印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【平成 30 年 12 月 の 需 給 動 向】

- 雪の影響もあり出材が減少、合板用・製材用に関係なく全体的に不足感が強まった。
- 全体的な不足感が強まったことにより特に必要な原木の値上げが生じている。
- 燃料用原木も雪の影響で搬出できない現場もあり販売量が減少した。

耳からウロコ

— 陶芸用アカマツ薪との関係は？ —

マツタケは、貴重で高い「秋の味覚」の代名詞である。かつてのマツタケの本場、丹波、広島などの年配者の話では、戦前・戦後は、毎日弁当にマツタケしか入ってなかった程ものすごく採れたという。北朝鮮の万景峰事案の時の、日本の輸入量の第一はマツタケであった。戦前・戦後の日本と現代の北朝鮮の共通点はいえ、松葉を集めて農業燃料として利用していたため、松林はやせてキレイだったことであり、それがマツタケの発生に適していたと一般的に言われている。しかし、古い時代からそうだったのだろうか？

「日本六古窯」という日本遺産がある。中世から現代まで続く陶磁器の産地である。瀬戸、常滑、越前、信楽、丹波、備前である。何の関係があるのか？マツタケの産地と合致しているのかも、とも考えられる。そうか、登り窯の燃料はアカマツ薪で、その注文は未だに多い。なるほどで

ある。しかしながら、この古い時代の窯の跡を調べるとアカマツではなく、広葉樹しかないと言われている。ということは、アカマツは後に日本に拡大していったことになる。人口の増加とともに、里山の過度な利用がヤセ地をつくり、マツタケ山となっていたと推測される。

もう一つ、日本の風景「白砂青松」も一緒と言われる。虹の松原、気比の松原、風の松原等、有名観光地も多いが、この風景はどうしてつくられたのかである。江戸時代の人口の増加と水田開発によって、どうしても砂、風から土地を守る必要があり、人の手によって植えられたものである。

こうしたヤセ地には松が適していて、木材として使うために植えられたものでないのは明らかである。更に河川にはダムがなく、河口に山から砂が流出し、潮により堆積したため「白砂青松」となったのである。アカマツでもクロマツでも、その時の人間の暮らしと結びついている。でもマツタケが貴重でなくなる時代は、今の人口減少した日本の里山の生活に鑑みると来ないかもしれない。